

昭和2年に書かれた画家松井天山の鳥観図には船橋橋から以南は一面海に向かって塩田だった様子が描かれている。ところどころに、石組みさせられた数隻が係留できる船着き場が何か所か散在している。

現在の地図と比べて見るとは、船着き場は統合され拡大されている。

それ以上に、で、高度成長期の流れの中、埋め立てが進んだことを示してくれる。結果2000年以前までに今は冷凍施設や大きな倉庫群の集積地となった。

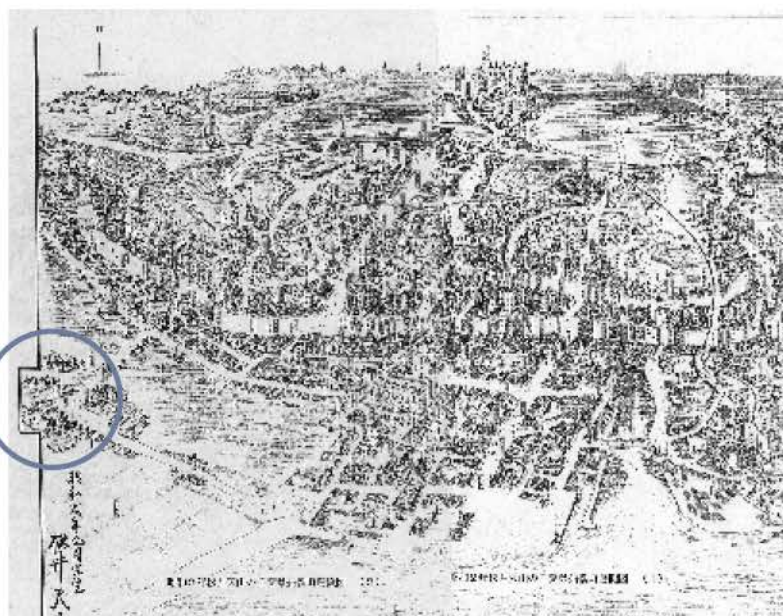
船橋駅から湾の見る視点をひるがえって、水面の方から船橋のまちを見る視点も、これからの時代に必要になるだろう。

建築家の故吉阪隆正氏が、日本地図を180度ひっくり返して今のロシアの側から、東海道の太平洋岸の重工業地帯に偏った日本の将来像の再考を報告したことを思い出す。三番瀬の保護の市民からの反対などもこの海岸線の保護活動のその嚆矢ともいえる。

玉川旅館



▲ 高速道路のわきの船着き場



▲ 画家松井天山が書いた昭和2年の船橋市の鳥観図 西図書館所蔵の書籍

この図を拝借して、下部に面した湾岸の形状を合成してみる。船橋橋を合成の起点として切り貼りした図が下図になる。想像が入っているので、イメージ図として正確さを期待しないでほしい。

既存の地図と現在の海岸線を合成してみると将来の課題が見えてくる可能性がある。船橋は中心街に狭隘な路地空間があったり、道が狭いなどのまちなみにも課題も多い。高速道路などに囲まれた船止まりのオープンスペースや水との触れ合える可能性を持つ隠れた場所がないわけではない。

今後大事な場所になることを想像し自転車に乗る。

◀ 鳥観図との水の空間の合成イメージ図

